

遣隋使と礼制・仏教

推古朝の王権イデオロギー

Japanese Envoys to Sui China and the Li System and Buddhism :
The Ideology of the Government of the Suiko Court

鈴木靖民

SUZUKI Yasutami

はじめに—遣隋使と遣唐使—

①遣隋使の派遣と目的

②開皇二〇年の遣隋使と礼制・楽制

③遣隋使と百済

④外交と仏教

おわりに

【論文要旨】

7世紀、推古朝の王権イデオロギーは外来の仏教と礼の二つの思想を基に複合して成り立っていた。遣隋使は、王権がアジア世界のなかで倭国を隋に倣って仏教を興し、礼儀の国、大国として存立することを目標に置いて遣わされた。さらに、倭国は隋を頂点とする国際秩序、国際環境のなかで、仏教思想に基づく社会秩序はもちろんのこと、中国古来の儒教思想に淵源を有する礼制、礼秩序の整備もまた急務で、不可欠とされることを認識した。仏教と礼秩序の受容は倭国王権の東アジアを見据えた国際戦略であった。そのために使者をはじめ、学問僧、学生を多数派遣し、隋の学芸、思想、制度などを摂取、学修すると同時に、書籍や文物を獲得し将来することに務めた。冠位十二階、憲法十七条の制定をはじめとして実施した政治、政策、制度、それと不可分に行われた外交こそが推古朝の政治改革の内実にはかならない。

【キーワード】 遣隋使、推古朝、イデオロギー、礼制、仏教